http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.059　12/07/17

知のネットワーク

80年代、東大駒場に自らを「みみずく」になぞらえ、詩と本とパイプとウィスキーをこよなく愛した名物英文学教授がいた。名は由良君美。その由良先生のエッセイ、『みみずく偏書記』がちくま文庫から出た。「知」のディープな世界にひたって（溺れて？）みたい人には、格好の教材といえそうだから、夏休みにでも挑戦してみるとよいだろう。

＊

そういう或る日、教文館の書棚にバーグのこの本(『動機の文法』の原書)が、どういう偶然からか一冊並んでいたのである。厚い本だったし、著者の名前は勿論、題からして全く内容の見当がつかない異様な本だった。目次も実に異常で、一向に内容を語ってくれなかった。

しかし、何やら妙に心を奪うものがあり、高い本だったが、決心して買うことにした。帰りの電車のなかで読みだしたが、バークの英語もこれまた異常で、なかなか頭に入ってこない。イライラしながら、良く分からない冒頭の部分を飛ばし、先のページをどんどん繰り始めた。

突然コールリッジの名前が眼に飛びこんできた。コールリッジは高校の頃から親しんできた詩人哲学者だったから、オヤと思い、巻半ばのその箇所から、再び読み始めることにした。コールリッジが若い頃、情熱をもやしたアメリカのサスケハナ河畔のユートピア計画、パンティソクラシーのことを、バークはそこで論じているのだった。(保戸塚注:高校生でコールリッジを知っているとは…!)

事柄を知っているということは恐ろしいものだ。少なくとも、そこでバークが論じている、ユートピアの論理の根底に必ず潜む必然論のロジックの意味は、バークの難解な筆の運びを飛び越して、すぐにすらすらと頭に入ってくるではないか。

その箇所が突破口になった。あとは、よく見透せない目次の森をさまようことは止め、索引にたよることにした。

索引の中から、自分の知っている人名、心ひかれる事項をひろいだす。それをつぎつぎに、飛び交うように読んでゆくのだ。ところどころ分かる。そのところどころが次第に頭のなかに点々と拠点を造り、その拠点が関心の網を次第に脳内に造りあげ、互いに互いを引きつけ合ってゆく運動が、自分でも分かるのだった。

＊

これが勉強というものである。「事柄を知っているということは恐ろしいものだ。」**とあるが、これが今君たちが勉強していることの意味でもある。日本史でも地学でも漢文でも情報でも、今学んでいる知識がきっかけとなって、より広く豊かな「知」の世界へと旅立てるようになるのである。将来何か自分のやりたいことを見つけた時に、いや、もっと直接的にいえば、大学入試の論述試験の際に、今学んでいる、一見何にも結びつきそうもない知識が、**「互いに互いを引きつけ合って」**大きな力となってくれるのである。**